

光 文 社 時 代 小 説 文 庫

変人武士道(上)

南條範夫 長編時代小説



光文社

長編時代小説

変人武士道(上)

著 者 なん 南 じょう 條 のり 範 お 夫

昭和63年1月20日 初版1刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	慶	昌	堂	印刷
製本	榎	本	製	本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (942) 2241 (代表)
振替 東京 6-115347

© Norio Nanjō 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70681-9 Printed in Japan

光文社文庫

長編時代小説

変人武士道(上)

南條範夫

目 次

変な奴やつ

変な出来事

陰謀

虚々実々

変な道中

追手

9

31

65

94

128

153

男と女

仲間割れ

魔心惨剣

岡崎城下

邪心妖剣

旅のもつれ

305 273 238 209 188 170

登場人物

- 白鳥大三郎……………出石藩士。柳剛流の剣の達人。
- 白鳥茂三郎……………大三郎の父。現在は隠居の身。
- 白鳥佐一郎……………大三郎の兄。白鳥家の当主。
- お絹……………佐一郎の妻。
- 袖姫……………出石藩主の御落胤。気が強く冒険好き。
- 糸枝……………袖姫の侍女。
- 一柳主税……………出石藩士。大三郎の親友。
- おしゅん……………出石の料亭「小田中」の仲居。
- 仙石久道……………出石藩主。
- 仙石久利……………出石家若君。
- 仙石左京……………首席家老。主家乗っ取りを企む。
- 仙石主計……………次席家老。正義派。
- 大光寺新兵衛……………出石の道場主。左京の配下。
- 金森右馬之助……………大光寺の門弟。
- 黒堂典膳……………凄腕の剣客。袖姫に執心してつきまとう。
- 脇坂中務大輔……………寺社奉行。

変な奴やつ

明日はいよいよお目見得めみえと決まった前夜、大三郎だいざうろうは父親の茂左衛門もざえもんと兄の佐一郎さいいちろうに呼ばれて、お説教をくらった。三年前に隠居して家督かとくを佐一郎に譲ってしまってから急に老いこんだ茂左衛門は、まだ五十も半ばだというのに、六十五歳ぐらいの顔つきをして、七十二歳ぐらいの声で、

「よいかな、大三郎、くれぐれも気をつけて、お勤めすることじゃ。本来なら生涯、部屋住みで終わらねばならぬお前が、お召出しを受けて勤務するというのは、全くもって破格のことじゃ。これも日ごろの武道鍛練が、御家老左京殿さきょうだんのお耳に達してのこと、重々ありがたく思わねばならぬぞ」

もう何十遍めかになる同じことを繰り返かえす。大三郎は少々うんざりしてきた。

「私の腕が立つから使ってやろうというだけのことでしょう。どうしてそんなにありがたく思わなければならぬのです？」

ふっとそう口走ってしまって、

——しまった、またやった。

と後悔したが、遅かった。佐一郎が真赤になってどなり出した。父の茂左衛門の顔をそのま

ま三十年ほど若くしたような真四角な顔だが、声だけは馬鹿でかい。

「このど阿呆め、何を申す、特別のお取計いがありがたいとも思わず、おのれの腕に慢心しおるのか、そのような思い上がった心では、先が案じられる。この兄の顔を汚すようなことをいたしたら承知せぬぞ」

「ご心配なら、お召出しを辞退してもいいのです」

「愚か者め、せっかくの出世の好機を逸して、一生この兄の居候で過ごすつもりか」

「いや、適当なときにはうり出してくだされば、なんとかして、食ってゆきます」

「浮浪人となって、由緒あるこの白鳥家の名を汚そうというのじゃな。白鳥家の先祖は、遠く戦国のころは、奥州谷地の城主として名をうたわれた白鳥十郎長久殿じゃということは、よもや忘れたわけではあるまいな」

茂左衛門は、白鳥十郎の名を持ち出すとき、いつもそうするように、ちょっと居ずまいを正して、不埒な倅を睨み据えた。

「先祖が城主だったことなど、別にわれわれになんのかかわりもないでしょう」

「なんという奴だ、お前は、自分の先祖を誇りに思わぬのか」

「先祖がいくら偉くても、現在、百二十石の貧乏侍ではあまり誇りにはなりません。おやじは土民だったが、倅は関白になったというようなほうがずっと威張れることでしょ」

「おのれは、百二十石の貧乏侍などと、父上や、このおれを侮辱するつもりか」

「そんなつもりではありません。ただ、先祖、先祖と言われるから、おかしいのです。もし先祖の名がそんなに大切なものなら、石川五右衛門の子孫などは、何百年たっても、小さくなっ

て生きてゆかねばならないわけです。妙なことですなあ」

大三郎がとぼけた顔でそう言つて、左手で顎の先をつまんだ。何か納得がゆかないときに、この男がやる癖である。

茂左衛門と佐一郎とは、顔を見合わせた。

呆れ返つて物が言えないという感じだ。

茂左衛門が少し哀しげに、

「もうよい、大三郎。お前の阿呆は今に始まったことではない。理屈を言うても始まらぬ。とにかく、明日のお目見得だけは、まともに済ませてくれ、頼む」

「はあ、もちろん、まともにやるつもりですが」

「万事、おれが指図するようにすればよい。口を利くな。黙つて頭を下げておれ、よいな」
佐一郎もなだめるような口調になる。

「はあ、なるべくそうします」

「なるべくではない。絶対にそうしてくれねば困る」

大三郎は面倒くさくなつて、あわてて、頭を下げて、ようやく解放された。

部屋を出て行つた大三郎を見送つて、

「困りものじゃな、全く。大丈夫かな。せめて、殿の御前だけでも、大過なくやりおおせてくれるとよいが」

茂左衛門が、溜息をする。半分白くなつた丁髷が、哀しそうに震える。

「明日は、私が終始つき添つていてやりますゆえ、なんとかありませんが、これから先の長

いお勤めが、果たして無事にできるかどうか、それが心配です」

「全くじゃ。名譽のことと悦ぶ心よりも、心配のほうが大きいくらいじゃな」

大三郎のほうは、自分の部屋になっている玄関脇の三疊の間に戻って、仰向けにひっくりかえっていた。

——全くうるさいものだ。馬廻組に列して三十石もらうのに、こんな面倒くさい思いをするなら、いっそ断わってしまったほうがよかったな。黙って頭を下げていろか、ふん、阿呆らしい。

足許の襖がそつと開いた。

飛び起きると、兄嫁のお絹が、半身のぞかせて、白い歯を見せていた。小声で、

「だいぶ、叱られていましたね」

「はあ」

大きな顔を大きく笑わせて、頭を掻く。

「おいやでしょうけれど、辛抱して、お父さまを悦ばせてお上げなさいな」

「全く、いやですな、お城勤めなどは」

「わかってます。あなたの性には合わない。きつといやな思えばかりするでしょう、可哀そうに」

「いろいろ聞けば聞くほど、どうも私には勤まりそうありません」

「たぶん、ながくは続かないでしょうね。お父さまや、旦那さまならなんでもないことでしょうが、あなたには無理」

「はあ、そんなものですか。私は、そんなに阿呆ですか。おやじや兄貴の言うほど阿呆だとは思っていないんですがね」

「私も、よく阿呆と言われますよ。実家にいたころからね」

「それはおかしい。義姉^{きねい}上は、すこぶる伶俐^{れいり}なただと私は思っています」

「そう思ってくださいるのは、あなただけです。お父さまなどは、私のことをよっぽど間の抜けた変な嫁だと思っておいでです」

「そういえば、おやじは——」

「ほほほ、わかるでしょう、私の旦那さまだってそう思っています。お父さまほどではなくってもね」

「うーむ、それは兄貴のほうが阿呆だからですな」

「変な話になりましたね、もうやめましょう」

お絹がそう言ってちょろっと舌の先を出してみせたとき、佐一郎の呼ぶ声がしたので大急ぎで去って行った。

翌日は、快晴。

大三郎は、父と兄嫁の祝福を受けて、新調の袴^{はかま}をつけ、神妙に兄の^{あと}後に従った。本丸の御殿にはいるのは、初めてである。

——おれの家よりはだいぶ広くて奇麗だが、なんだか妙に陰気くさいな。

大三郎があたりを見まわしていると、
「きょろきょろするな」

と、佐一郎に叱られた。

控えの間で、ずいぶん長い間、待たされた。道場で板の間にすわりつけているから、大して苦しくはないが、あまり長いので、うんざりした。

「兄上、まだですかなあ」

「黙っとれ」

佐一郎が緊張しきって、こちこちになっているのが、頬の筋肉の痙攣でそれとわかる。

——えい、勝手にしろ。こうなったら、夜中までも待ってやる。

と腹をきめたとたんに、茶坊主が呼びにやってきた。

佐一郎の後にくっついて、長い廊下を渡り、広間の前までくると、佐一郎が、廊下に両膝をついたので、そのとおりまねをした。

「許す、すすめ」

と、声を掛けたのは、家老の仙石左京であらう。佐一郎が恭々しく頭を下げて、膝行しながら、袖の隙から背後の大三郎の様子をうかがう。

大三郎は、兄のするとおりにする。

佐一郎が、少し左にからだを移して、

——ここへ。

と目くばせしたので、大三郎は、兄と並んだ。目付の岩田将監が、

「白鳥佐一郎弟、大三郎にございます」

と、言上した。

藩主仙石久道は、奥の間の上段にいた。

六十近い齡をして、若い妾を三人も持っているせい、ひどく疲れた顔をしている。大して興味はなさそうに、大三郎を眺めたが、

「ふむ、からだは丈夫そうじゃの」

と、つまらぬことを言った。

「はっ、しごく丈夫でございます」

大三郎が、頭を上げて答えた。

佐一郎が、さっと顔色を変え、あわてて、大三郎の袖を引き、

「御直答はならぬ、愚か者め」

と、鋭く小声でたしなめておいて、岩田将監のほうに向いて、

「はっ、仰せのごとく、すこぶる健康でございまする」

と言う。将監が、それを久道にむかっけてくり返した。

「退るがよい」

家老の左京が、顎をふったので、佐一郎は頭を疊にすりつけた。

長廊下に出てから、恐ろしい顔をして、大三郎を睨みつけて、

「無礼者め、殿に対して、お許しもなくじかにお答え申し上げるとは何事か」

まるで自分が大失態をしてしまったかのように、額に汗をためていた。

「殿は私に聞いたのでしょ、丈夫そうだなんて。だから、私が――」

「お許しがないのに直答してはならん。よく覚えておけ、阿呆め」